

山本太郎
長篇叙事詩

子イイズ

山沢一郎 監
思誠社

	『ユリシイズ』 詩・山本太郎
	画・福沢一郎 発行人小田久郎
	発行所株式会社思潮社東京都新宿区市谷砂土原町三丁目一五番
	地 電話東京二六七・八一四一
	番 振替東京八一二一番 印刷
	文唱堂 製本岩佐製本 製函岡
	本紙器 製版東京写真印刷 用
	紙北越製紙特種製紙ダイニツク
	一九七五年八月十五月初版印刷
	定価三五〇〇円
	1092-100027-3016

山本太郎
長篇叙事詩

ユリシイズ

福沢一郎画

思潮社

目次



へどろばらんこ 二

羅針謀叛 二

焼畠の罌 七



無言交霊 元



「隠れ道」に関する箴言 三



蟹とり綺譚 五

潮間帯 五

とりよろう蟹の族は 三

毒の泡 五

ハーフィ・フーン 五

蟹船の歌 六



航海日誌 六

吃音 六

渾天儀 六

快樂原理 七

權子唄 七

犯罪告知 七

上陸 六

呪言の圈 三

恐怖 三

輪の掟 三

逃亡衝動 六

蛮人素描 三

巫女の島 六

鮫肌殺し 六

風景反転 一〇

鬼薊の歌 一三

アウラの歌 一七

KI 木靈もどき 一〇九

I あるでばらん 一三五

眼なしの泥の 一三五

旅の構造 一三三

海豚の唄 一三三

U 海辺聖地 一四二

直交座軸 一四二

海狩り唄 一四二

生石 一四二

K ハルマツタン島 一五五

前景 一五五

有耶無耶圖 一五五



火焰縦横 一五三

足長手長 一五三

夢喰いびとの唄 一五五

Gran seco 一五五

さきむだちや 一五二

後記 一六六

挿画目次

へどろばらんこ	一六
無言交霊	二六
蟹とり綺譚	三七
蛮人素描	三三
風景反転	三三
三人の巫女	三二
あるでばらん	三六
有耶無耶園	一四七
足長手長	一六五
地獄	一八五

ユ
リ
シ
イ
ズ



へどろばらんこ

羅針謀叛

太泥国は俱留砌呂を按針し
航程万里 朦朧の涯てにある

海が

ともかく海がふるさとと
なんべんくりかえせば足りたか
奴とお前とそして俺
顔ぶれは何時も違っていたし
頭数も三人ときまってはいいない
名前や組合せなど
どうでもよかったんだ

遠い声に誘われて

すくっと立ちあがるのは

悲しいけれど

ひとつかみの人間

淋しいけれど

未熟な脳のヒトの群れでは

ひとつかみの男だけだ

女は精霊すたまの通う藪の小径

肉が重いので

母系の迷路を編んで

陸くわで暮す

海だ

ともかく海へ還ろうと

発ったのは

燃える雄の集団

移動する肉の塊り

60の手脚を

てんでに動かしながら

塊りの上に

15の雁首をつきだし

左右にふりふり

草原を払い

眼玉を血走らせ

突如 走りはじめた羅針謀叛

精神の方角へ旅して

碎けたいと願うこと
若さだけが

奴とお前とそして俺
海のつけこむ隙間だった

*

積乱雲の巨きな腕が
海を抱えて

今日もゆさぶる

雁首は

潮に灼かれ

北から南へ流れて行った

太陽の中筋道が

裂目一つない蒼穹に

朱金の曼陀羅を

描いて消えると

いたずら小僧に

運ばれる金魚鉢のように

海はがぶりとゆれて

昼夜平分線を越える白眼の行列
やがて月の懷中電燈が

やって来て俺達を追いつめ
毎日 きまって囁くのだ

《生キテルヨ マダ

《ヒイ・フウ・ミイ・ヨウ……

《変ダネ 一匹足リナイゾ

《喰ベチマッタンダ

《コイツダ コノ黒イ出目金ダ

悪い手 海の底からのびてくる

藻の悪意

雁首が一つ消える喪の夜

饅えた水 塩の抜かれた

黄色く酔っぱい水溜り

俺達はそんな切ないものの

よどんだ運命のなかを

泳いでいる筈はないのだ

《ここは村とは違う

と跳びあがった尾鰭が

隣りの奴の頬を叩く

奴とお前とそして俺

言葉よりも

瘦せちまった尾鰭の唄

へ痛いじゃないか

へ駄目だ 眠るな

仲間を撃つことの快感

しびれる生せいの手ざわり

夜光虫の花ビラが散り

尾鰭の集中攻撃が

波よりも激しく

てんではらばらに襲いかかる

血を吸う仲間

鱗をこすりあわせ

うねりにまかせ

暗闇の渦にまかれて

廻転しながら啖くはう仲間の肉

海が その大茫園が

なんてったって揺れ止まぬ

いのちの捨てどころ と

なんべんくりかえせば足りたか

